重修真書太閤記

七編

六

459
66

へ18 特
門 S S
號 459
巻 66

消 福永

重修真書太閤記七編巻之十六

左馬助光春諸士必死を止る事

并明智侍所々へ分散の事

明智日向守光秀の妻い齋藤内藏助利三の妹なり才智世よりすぐれとう軍畧よ賢しけれども光秀も深くこれを重んじてけう兵糧積うこうして鉄炮玉藥のさし引とべく陣中の諸要を心よこめく取賄ひしうべ諸侍中間小者末ゞ迄大名の内室よい有難さ人よ取とやしけうの一説よ妻木主計頭範賢の妹照子とのひ一説よ

同攻會印

伊賀國名張城主服部出羽守保章女といひ又一説に妻木勘解由左衛門範照女といひ或い丹波國の者といふ但妻木氏い十兵衛光廣の母ゑ〻て龜山城ゑ自殺ととゝのへぐ今坂木ゑ在て幼息と落〻つるい齋藤氏なること明らかなり

然べ夫のゝちそれゆゑみとて二歳の男子の在げるとべとゝにその母と共ゑ朽木の谷の奥ふゝ〻忍ぐを夫より丹波の國山國といふゑ在所ゑめ〻〻置

然〻てのち落殘う〻侍どもと呼あつめ神文の上ゑておの車とめうう出〻軍用金ととろち與え坂本の城を出て是と養育をゝと懇ゑいひさと〻我

身い最期の用意をんと奥の一間へ入〻べ村越三十郎三宅周防守をゝぐめいづるも茫然とて互ゑ顔を見合ゝぐ〻いのものもいとざうき良あうて村越三十郎大息つゝき申げる樣弓矢取の死をべき處ゑて死されべ却〻恥を見るとい實ゑそひひう某山崎ゑて快く打死をべうう〻身の今ぐ〻長生て殿の先途を見果參らをんと存〻ひて終ゑ山崎を切脫勝龍寺の軍ゑもゝづゑ殿の御供〻てひひ〻身ぐ小栗栖ゑてい路を踏あやまちて御最期とも知ぐ然べ當城ゑ於て花々敷戰ひ〻て日頃の鬱念と晴けひゝぐやと存ひひつる身う奥方

の只今の仰神文の上よりへべ背きめくゆへど
も當城を忍び出ひ事あそ口惜くいなれその上よ
りの幼稚の君を懐よ〜城を出ひそで誰ろ見のめ
し申べき跡をめへうとて武運つゝなき我身ろ
なとめふ〜と又先とおのくへべ口惜ゆ村越三十郎
い主人の幼稚を懐よ〜あうら敵よ後を見をとう
と世の物笑よならんと眼前よそひと歯をうゝ拳
を握うてめゝうゝうゞ三宅周防守をとゝ出何よ
も神文の上よひへゞ當城中よて腹を切ひとい思
ひ止やうひべ〜然とて幼稚の君達を抱めくて當
城を出んとも實よ以て難義たるべ〜こい申セど

も正〜く日向守殿の御亂とそひ上いあれを無下
よ仕ひ事も亦勇ゆ〜忠なくいづそすとも命一
川日向守殿よ奉うひ道理い同じとよいつゝ今宵
ゆの雨ゆ〜くいを頼そよ一ちづ出城仕るべくい
と云い村越も何さよ敵よ見とめらゝ恢とぬ處よ
てとも角もなういべ〜と云を聞ろう荻野河内守
今峯新助久下三右衛門妻木勘助異口同音よ申様
我々も當城中よ於て切死と覺悟仕う〜處も各と
同じ〜くひへゞども神文の上よて奥方の下知を受〜
こと亦以て同様よひ依てい各と共よ當城を罷出へ
くひたゞ〜敵よ見咎らゝい時の用意よいづゝも

いつまも幼稚を懷ゐ抱さひ〳〵と申合を或い衣包まゝ小桃るとを以て小兒の形を似と蓑笠を着て忍ひくゐ城を出ひると云とも篠とつゝぬて降雨ゐ雷さへ〳〵鳴てゝめひべ敵もまとゐ油断して且い又めゝる車あゝんとい筑前守も思ひ寄ざゝゐや城の四方の道閑ひ誰と見止ゐめのもなゝされでとそ三十餘人ののの共も心安く比叡辻苗鹿雄琴の浦とを傳ふもあり穴太山中志賀の山路をゝゝふもあり心々ゐ忍びゆく身々いゝゝつゐ分るをど心い一川主人の孤兒甲斐〳〵も養育ゐ心々をゝゝひり

北村家傳ゐ明智日向守光秀の遺腹の子あり伊賀國服部平十郎いタ戚の好あるを以てゝれを養育しのちゐ江州北村氏の嗣とゝと云又一説明智光秀妻服部氏の弟を北村某と云此家ゐ光秀二歳の男子を養子とゝとも云長閑齋い三十餘人ゐ〳〵ゐ出城をる体を見て何さま寄手も此雷雨ゐゝく油断〳〵るとおゝ〳〵夜廻りゝの拍子木も聞えゝ陣々の篝もわのゝらゝめゝてい彼人々も思ひのまゝゝ立忍ぶなるべゝさとをゝ主人の孤兒も何也の山家ゐてゝ生長〳〵めゐゝ〳〵めゝてゝ明智の亂嗣い絶すゝさ也

又筑前守昨日今日の軍ゑろさうゑ打勝その勢破竹の如しと聞とも北國ゑ柴田勝家ゑう伊勢ゑ瀧川左近あり此二人何とて筑前ゑ下風ゑ立て其指揮を受へきや必定相争ふく合戰ゑ及ふへし織田殿の御子ゑ信雄あり信孝あり信孝ゑ兄ゑとも母卑しく信雄ゑ弟なれとも母重きゑ故ゑその上ゑたつされゑ信雄信孝心中に相挑むこと絶へと聞ゑ今信孝筑前守ゑ付て其旗の向背を守うゑとも當家滅亡の後ゑ必定自立の志を興さるへし左あらんゑゑ信雄何とて信孝の麾ゑ從ふるへきや丹羽五郎左衛門尉も今程ゑ筑前ゑ手と一ゑ見

えてゑへとも終ゑゑ中されく相互ゑ胡越の心となりゑゑ又信忠の御子ゑ三法師君もゑ織田殿の正嫡ゑ我ゑ宣ゑんとも遠うゑ筑前守ゑ三法師殿を守立て天下と此御方の御心次第と申べきゑ然らば我戰死の後柴田瀧川丹羽の人々とゑび織田殿の御子孫ゑ就て合戰止時あるへしさなう三七郎信孝の母ゑ坂氏熟田の岡本太郎右衛門ゑ家ゑして永禄元年戊午の歳誕生あり今年廿五才なう信雄の母ゑ三位中将信忠と同じく尾州生駒氏の女なう信孝ゑ後ゑこと廿日ゑして

生る然れども嫡男と同母なるゆゑ故に信雄を二男とし信孝を三男とし信雄は伊勢北畠の養子として當時尾州清洲の城に住し凡百餘万石を領し

と云信孝は伊勢神戸の養子にして當時濃州岐阜の城主にして五十餘万石を領したりし

又東海道には濱松の御威稜世に勝れたるあり關東には北條左京大夫氏政里見結城宇都宮佐竹伊達最上芦名南部の家々北國には上杉景勝九州には嶋津義久大友龍造寺中國には毛利の三家四國には河野長曾我部これ等をのゝ都に旗を立てゝと望むるものゝも織田殿に壓えられて居たり人々時まち

得たる心地しゝゝ忽に自國の兵を整え上洛せざやと謀るらめ然あらんには此三十餘人の人々も何の家にあり付涯分の忠を竭しふゝ一卿一郡主となるんとも遠うゝゝ其時は年來の恩義を思ひ出て此孤兒の生長るを引立て亡君の墓の草を刈除花を奉る春秋も有べきなりいしらも謀りるふのうか實に先をる孔明生る仲達を走らしむといはゝるゝことを申べき亡君の智慮いさるとなるとゝ考奥方の心の猛く決斷のこゝやさと又世に多うるべゝとも覺えゞと取々に感賞しあくるおそゝと待ちぶる諸士の心ぞたのもしき

明智左馬助白狐をうつ事
并入江長兵衛始終の事

寄手の中に入江長兵衛といふものあり元來い江州の産にて觀音寺の城主佐々木義賢入道拔關齋承禎の被管なり明智左馬助いまだ浪人にて三宅彌平次といひし頃ふと此長兵衛と親しく語らひ互に心も置ぬ中となり明暮に出入くらひけるが頃い三月の季の空永さそる日と暮しうち鉄炮携へ彌平次い長兵衛ら家に音信ていうるに入江ぬし今日い取とけ長閑なり伊吹の山へとけ入て兎に角あと鹿にもあと山の神の幸にまかせて一日心を

のどかさぐやと存ぜるなり御同心あらばやとそそのかしまた長兵衛も元より好む兎狩やすこい某も御邊と差そそぐやと存じ立し處なりいざとをあつといふ早く火縄手ぐさを打つれて伊吹の山へとおのむきひら柳この伊吹山といふい七高山のその一ふして晴天にい駿河の富士信州の駒ヶ嶽まで見そらし川べ此山南と面として犬上愛智の郡に向ひ北と背として淺井伊香の郡に續く絶頂に彌勒堂それに隣りて寺ヶ嶽そこより下りて阿彌陀ヶ礒口せぐ奥廣き岩窟なりそれより次に倉谷長圓坊といふ天狗のところとものや自然泉に

鞍掛石ト治ゞ原ゟ行道石彌高嶽と伊吹の瀧伊吹
四ケ寺と申てい觀音護國彌高護國長尾護國太平
護國と名付たりこれらとそべて狩らゝ〳〵日もと
や亭午とあゞ〳〵き頃やゞて更ゟ得のゝ有ざれぞ
三宅入江の両人不興ふゞ〳〵芝原の木蔭たづゐて
枯木と焼腰ゟ下たる破子とひゝき一椀の酒を温
めあのゝふ心と打出し問ひ答つ時をうつ〳〵おのゝと
ゞ二人い眠氣と催ふ〳〵芝居ゟ肘を折うゞめ南柯
の夢と結びゝ〳〵颯と吹くる松風ゟさゝしの栄花
も醒ゟひゝ醒てあゝりとゝゝ見まい残ゝ〳〵看い
喫ちゝ〳〵破子の飯もあゝべゝとゝゝ不思議誰ゝ

加様ゟあゝひゝらん彼處爰處と見廻ゝとゝち森の繁
みゝゝ白狐二疋ゝ〳〵出南とさゝて逃てけり彌
平次立あゞ〳〵悪ゝ狐のゝとゞゝ〳〵めいゞ追ひめく
打取んと鉄炮取てうちのゝ〳〵る長兵衛いめゝこゝう
好む槻の弓三年竹の箭を取てゝの引兵とてゝあつ
箭いそれゝ狐を見ゝうゝ〳〵ゝゝ彌平次いゝ〳〵怒ゝと
増ゝつゝ〳〵追のゝと山と越谷を渉ゝてたづねゝとゞ其
後更ゟ影をも見ゞ彌平次ゝゝこゝゝに氣とめゝあゞ峯
とも尾とゝと直ゝ〳〵ゝつゝゝこゝゝ〳〵ゝゝ山ゝゝ山と山
ふゝ〳〵狐と追て狩ゝ〳〵ゞ長兵衛今いゝゝれゝて
いゝゝ三宅との今日ハ幸ゝ〳〵引ゝ〳〵重ねて勢

子と催ふして今日の遺恨をとゝさんといへども
彌平次聞入ばいのゝ今日を過してい詮ゝ思へ
べ當の敵ゝ日もいまゞ未刻といふもならじ最
一川狩して意と晴さんいざくとゝめたく猶山
ふゝ入よりゝ處い上野の即の上十町ごろうを
馳越て小高野といふあるうゝ蹴鞠場をも狩く
らゝ大平といふ山とゝ大洞小洞二川ありその
中ゝ白狐一疋うゝ居らるゝと見付ていあるさに
ごといふゝ早く鉄炮の筒さゝ向てとゝぞよ火ぶ
たと切んとゝるとみてあゝ不思議狐たちゝ涙
となゝぶゝ人のゝのいふ如く我い千年を經ゝ野干

なゝ今ゝも懐胎をゝ我壽数い盡るゝと胎中の狐
兒の命いのゝ盡ゝ助けもくゝと泣ゝふゝむ長兵
衛見るゝゝ不敏なゝ三宅どのゝゝもくゝと頻ゝ
あれゝと止むるゝと彌平次更ゝ聞入ゝ己ゝ従
類ゝ今朝ゝゝ種々骨を折ゝるゝ思ゝむゝゝゝと云
ゝゝゝてゝあてゝゝ些も過ゝ無慙ゝ白狐い黒ゝ薫ゝ
めゝゝて死ゝゝゝ彌平次大ゝ悦び彼白狐を肩ゝ
うゝけ我家へゝたゝ引ゝゝゝ狐を調ゝて酒ゝちの
み畫の疲を休めゝとゝゝゝ然ゝゝ長兵衛ゝ長子ゝ
小七郎とゝ今年十七歳發明と云ゝゝゝゝ孫ども
又魯鈍なゝゝもゝゝゝ有けゝゝ其夜誰とも知ゝ

小七郎〳〵と呼けるよりうち小七郎庭の折戸を開き表へ出るべ召具あまた連たる侍ゞ我い京都将軍家の御内人よ荒川民部丞といふものなり将軍御邉の器量を知召只今召つれ来るべ〳〵との上意なりいざ某と共よ御立あるべと申よりたけ小七郎大ふ喜びうつ驚き身よあまりもそる忝なきといくたびとなく額づき然べ御供仕るべ〳〵たゞ父母ふ御使の〳〵と申聞とんと云べ民部丞いや其車ハ只今親御ふ申たり少も早く上京あるべ万事ハ某ゞ家ふて申合べ〳〵とそ小七郎と伴ふひ立出けるゆ程もなく勢田の辛橋うち渡り栗津の原を過行く打出

の濱の濱風ふ鳥の海原をへ遠く霞よ初めるゆう崎の松をゝ余所よ見をこゝて大津逢坂関寺やくや日岡よあるうよりう室町御所ふ著〳〵べ民部うよ是心を冨衣裳あらためて大小の刀をこゝ〳〵御門〳〵を過ゆけゞ御車寄ふ中門廊遠侍の侍衆めで度ひと式臺一番所〳〵と見めくるふ國國ふうの大小名烏帽子直垂大紋うを威儀と正して伺候をりとう〳〵をるわどふ誰といふ知ゞ直垂ふ風折烏帽子きる人出来う近江國の人江小七郎とハそのかたよりとひくれく小七郎ゆ〳〵こまう入江小七郎ひと答ふれゞ此方へこゝと伴くれまさ

一間二間と過行、爰ゝといらるゝ畏り首を擧てと見まゝ上座ゝ管領三好修理大夫義継その次ゝ岩成主税助上野中務大輔長岡兵部少輔三淵大和守和田伊賀守なるゝうさうて松永彈正少弼と居ゝたり管領扇を取直し入江小七郎たゝうゝ承これ其方ゝ祖父入江長兵衛朽木谷入御の時朽木土佐守植綱と共ゝ莫大の軍忠を盡さゝ先将軍薨去彼是御事多くて今日ゝ及ばれたり然るゝ其方事ゝ祖父長兵衛ゝ心体と受継将軍家奉公の志厚きことと聞食されつるゝ急ゝめ上をとられたり追付その方ゝ父とも召るゝ所領ハ山城國

稲荷山の西の峯ゝそ千五百貫の地を下さるゝゆめて御朱印を出さるゝ申さゝ管領ハ奥のうゝへ入るゝゝ諸大名小名衆も續いて席々へ退去おりそその處へ荒川民部出来り今日の慶とのゝこれゝう管領の御館とゝゝめ列座の衆の家々へ御禮申さゝ案内知むとぬ其方ゝれハ某一所ゝ勤むゝゝそ小七郎ゝも多くの召具を差畧し荒川民部ゝろともゝ回勤しけるゝ何とゝても祖父の軍忠ゝうゝて召出さるゝ入江小七郎ゝとゝめらさゝゝゝゝ小七郎ゝ面目と施しけるゝ将軍家ゝうの御下知とて管領の家人室町御所の末

の町より家と點じて小七郎より與へけるべし小七郎その家に入てみるに客殿居間放出玄關臺所そなべく殘る處なく臺所に竈水瓶米櫃味噌桶塩桶久喜桶何一切足ざる處なし又眠藏に入てみるべし純子のとのいもの沈の枕燈火手燭そなべく見も知ぬわどの結構さ夢に夢ら心地をうさて其夜も明し時三淵大和守和田伊賀守出來う御邊田舍に生長しつるべ弓馬槍劍をくめその藝々定めて田舍めさたるべし依て將軍の命にまかり我等二人罷向ひ明日より武藝と御邊に指南をとのことなり然る上い我々二人十今に師範とへけるべ隨分出精し

て上の御用に立るべしとのことなり小七郎慎で御受申何様にも御取立下されゝべしと答へける その時大和守伊賀守いさまさも有べ次に小七郎と云名もいうぐとて將軍家より入江左門と改め申べしと仰られてう此義も心得ゝべしと申さるそれより小七郎い入江左門と改名せめて御使とのひ師範のことあれば此二人に酒を出しゝい でやとれのひ付處へ勝手より酒飯さまくうる屠たると見るべ酒い伊丹の諸白にて肴へ山海の珍味を盡し盃盤をこぶる狼藉ふ〳〵處へ白拍子五六人いづれも容色鮮娟として羅綾の袂をひるか

〳〵春鶯の囀とつ〳〵ちうざたる占たる蘭麝の
匂紛々たり
伊吹山の狐入江左門をたぶらかす一段い別
し一書あると聞り然ればとても余いまだその書を
見ずして其概畧をもつて記をのこ

重修真書太閤記七編卷之十六終

重修真書太閤記七編卷之十七

入江左門空し武術とわらそ事
并入江長兵衛不覺を取事

天地の變動い陰陽の消長よりて災異をあらそと雖
も其理あつて其變とあそ奇といへべうそ然ふ
し草木禽獸の怪ある是理外よりあつて人をたぶら
うそと又怪しむべし鳥羽院い十善万乗の王体三
種の神器の擁護あるとて老狐の為し誑さるに給ひ
しも邉土遠境よりして弓馬専門の三浦上総両雄の
鏃よりして終し其障碍をなすふ是朝政の虚よ

楽して災となり専門の武勇よりつく功を奏さ
むべ武士の志處たら一心の空虚ならざるを以て
要ととべし爰に入江長兵衛う忰小七郎いおのひ
設けぬ将軍家の召に従ひ御家人の列にいり左門
と改三淵大和守和田伊賀守教に孫呉の奥
義に通じ築城攻撃の習ひ夜軍水戦の法龍蛇鶴翼
の陣法鹵簿所候の式残ふ處なく心にたくくへけ
むべ両将も今ハ傳ふべきこともなく近ごろ将軍家
の御前にて其術を御覧に備ふべき旨仰出されつるとべ
左門も大に喜びその日とこそ待たりけ然る
に五七日經て長岡兵部少輔藤孝将軍家の御使と

して鎧物具太刀刀鎗長刀へ云もさらなり馬に鞍
置ゑそうて来る十一日に御所の御庭にて左門が
武術を上覧あるべしと仰出され其日になれば上
段の御簾を捲て出御あり御座の左右へ長岡兵部
少輔藤孝上野中務大輔とそしめ近習の武士並居
たり三淵大和守義藤和田伊賀守へ左門が師範た
ふるゝ御椽に伺公し左の席へ管領三好修理大
夫義継岩成主税助政成赤松刑部少輔範秀右の方
へ仁木細川吉良石堂畠山等其外宗徒の面々威
儀を正してこゝに居る庭上へ管領家の老臣松
永弾正久秀陣羽織を着して跪く入江左門へあづ

こづと御庭へとゝ見出てぞひうくひう左門その日の装束い先へ拜領したりつる萠黄威へ白銀以て秋の野彫たる裾金物と打て附たる鎧へ同じ毛のさゝゐ頭へ三日月の前立打さる冑の緒とゝめ朱柄の采配と鎧の弓合へさし赤銅造の太刀と佩月毛の馬の太く逞こゝへ貝鞍置紅の厚総掛て打のつゝ長刀下人へ持と打出しそのありさまへ天晴一騎當千の武士ゆと一さい立てぞ見えへける義藤御掾へ立あがりくゝ此程誓古の成出しを御覧あるべきとなるぞとく仕へと下知をゝべ左門馬上へ平伏し御前へむりひ腰なる采配取出し

くゝのさ口と初とり城責夜討の隊伍と正し縦横無盡へ馳廻り士卒へ下知と傳ふるさま實へ一方の大将軍とゝも見えへけゝ又弓矢と取て打番ひきりくゝと引きぶりく追さまへ切て放てべ的の真中射貫き又乘廻して二の矢とべきぶりくゝあおしのきりくへひうと放てべ同じ矢坪を射たりける御掾へ並居し近習外様の面々一同へ射るうやくゝと感ずる聲きぶくゝいなりうも止ざりけり三淵和田も面目と施し将軍殊へ御機嫌うるくゝく猶打物の業仕ゝと仰へ左門うくゝふまう下人へ持そし長刀追取馬へ鞭うち鐙と合とゝの長刀と水車へ廻

丶四面ゑ當り八方ゑちらひ〳〵もどめ〳〵ゑへ十文字ゑ〳〵うとみるとべゆ〳〵ゑあ〳〵それ蝶鳥ゑんとの飛如く馬と馳るゑあと秋のあ〳〵ゑ紅葉葉と吹ちら〳〵たる如くゑいとで御感ぞやちうける管領い申ゑ及ぶべ伺公の面々おめこべ聲と出し川つ近頃奇代の名人ゆと譽ぬ者こそ無うひゑ松永弾正左門ゑ向ひ其数度の戰場ゑ合たもど御邉の如き働いゑ見べ天下ゑ雙ゑさ名人ゆと賞美とゑべ左門い面目身ゑ餘う御前ゑ出べゆうて御盃ゑうて御暇とぞたべ〳〵うけるそのゝち上野中務大輔御諚と傳へ御邉此度の勲功ゑ〳〵一

方の大将と許し〳〵ゑるなれば早く古郷へ帰う父ゑ〳〵ものゝ〳〵うゑ光ぞゑへとて時服あど拜領し直ゑ都と發足と其行列い先狹箱ゑ持筒持弓の数とあうべ綺羅とうざう多くの供人従へ〳〵古郷へゆざる錦のたゆと夜ゑいあ〳〵ぞ白昼ゑ江州へ〳〵と帰うひゑゆ〳〵〳〵内ゑゑうゑ小七郎こそ只今罷帰うゆぞと大音ゑ呼ぶれば長兵衛大ゑ驚き己家出をゑゑ彼方尋し〳〵うど行衛定うゑちゑざうし〳〵ゑ今立帰う〳〵其ゑ〳〵ゑ小七郎とい見つゑ共のぶう〳〵さ有さゑやと叱うひれば小七郎少も臆をべ某将軍家の召ゑゑう都ゑ上う祖父君い先将軍義輝公へ

忠勤の者ゆえ、べとそ御家人ゆ召加へ〳〵ゆ軍法古實
残る處なく傳授〳〵の勇士の譽と得一方の大將
ゆ任ぜ〳〵ゆ父とも同道いさんべ〳〵とて御暇被下
我等の供人多く召連たりと語り〳〵べ長兵衛い
よい〳〵あるゆとそ已い物ゆ狂こてら將軍家の御
前ゆ召ゆし者うめ〳〵迫ゆ衣服い破ゆ髪いおどろ
ふふう亂し更ゆ大將よりの〳〵休ゆ非びさらば都ゆ
あうて傳へる兵法古實をさく〳〵とて一り二りの
と聞たり〳〵うど取留もなく空言のこ言語ごゆ整
そべ長兵衛大ゆ怒う扨い己狐ゆ誑され〳〵ゆ兼
てゆう當國伊吹山ゆ年古狐の住て多の人を誑と

〳〵とそれい人の身今い我身の上なれべ伊吹山へ
今上う狐狩〳〵て討取んと拳とあらう歯とうとて
狩の用意となる處へ長兵衛日頃信じたのこ
つる釜そ〳〵ひの祢宜來うけるべ長兵衛夫婦大ゆ
喜び小七郎ゲ車めく〳〵あう〳〵と全く狐ゆ誑され
〳〵と覺めるべ今ゆう親しき者うう催し伊吹山ゆ
狐狩し一足も餘さべ打殺さんと存ぜるなう小七
郎ゲ本心ようへうい様御ちく〳〵頼存るゆ云い
るべ祢宜い大ゆ驚きそ多くの人と催して伊吹山
ゆ狐狩〳〵ゆのなく〳〵べ狐い狩取得さう共めく
戰國の世うて人數と催〳〵おとんも上へ對してそ

の憚あるこゝ非びその上狐ハ愛著深き獣なれば殘
〻狐の讐と成んも計らるべたゞ穩便の御とか
らひ〻と然るへけれ某愚按とめ〻らるゝ其許さ
まと同道あるといひ〻い同じ〻誑さんのた〻
な〻ん尤あ〻べ父子共ゝ狐の為ゝ辱と受んも然
るべ〻〻〻べ〻〻〻御用心ひへう〻某神道秘密と
以て祈りひそんまいあるどう小七郎殿の本心ゝ立
ゆへらぬとやひべき奥の間と立こう出入と止め御
父子とたゞ三人其内ゝひう御ならひと仕らんハ
如何と申けるまゝ長兵衛夫婦もげゝもと悦び
ゆ〻〻一間とこつらひて家中の者ゝも仔細と傳

え父子打連て祢宜と共ゝ一間ゝとこしあるひけ
る

入江長兵衛二度不覺と取車
并尤馬助直勇懇志の車

長兵衛ハ小七郎の物語と聞あるれとて扨も〻
愚鈍ゝ悴と申ゝ以て愚鈍ゝとこと悔〻
けるとさうとて本心ゝ如何ぜん此上ハ伊吹
山ゝ馳上り狐と狩盡さてのち憤をそこ〻止べ
けると怒りけると又金拂ひの祢宜ゝ利害と説と
折角勇氣と萌〻けるも中折父子諸共祢宜と共
ゝ一間のうちゝ閉籠り沙汰とるそぞい女房ゝも

來ることなりとて戒めたれば下部なんどは勿論か
つて戸の外なる内の体を伺ふに高間の原なる神ら
まうとのいふことさけび坎艮震巽離坤兌乾と唱え
たり今朝なるこゝも三時四時なるも及ぶとのへども
三人とも食事もをゝ如何あることやとたのひあら
ら心なるこゝ案じ居ける處へ三宅彌平次入來り此
程子息の家出あるこゝ今朝帰りあひ由何なる
事なるて十餘日を過をるゝ世なるゝ神隠しなる又
ら狐ふどなる誑うこれなるる容子ハ今ひうと
長兵衛う妻ふ問けるる妻あるこゝ次第を細〻譚
う今朝なるこゝ四時ふ及びゆるのも欲るこゝぬる

ゆ音もをゝ祝の聲の小〻聞えゆへども立入ると
と禁めてゆへゝ爰ふめゝていなると云ふこゝ彌
平次も襖障子ふこの副くこれを聞ふ祝の聲陰濁
ふこて陽清の氣なる祝の辭も二句づゝ續くて
聞ふとど兎角陽盛の詞を止めて唱えざるハ不思
議の事なるとふの人つゝあるこを見ゝば長兵衛ゞ
妻の態相も例ふ
見えけるこふ彌平次こてゝと心付何なるもをる
長兵衛殿ふ面會ゝ申入べゝ要事あるこ御目ふの〻
らんと一間の障子を引明んとをるを長兵衛妻女
あるこをゝとの只今申ぶゝ祈禱の濟すで明る

ことなるべと申ていま今そこ御待いへと止むるを
彌平次更に聞入どいづれも長兵衛殿に面會い
たしゆべき今う可申とて彌平次障子をさつと引
明るとそのまゝ中の祢宜大に仰天し表のうへ
逃出るをみて彌平次とうさび小柄の手裏剣をう
と打び誤たど祢宜が襟のとを横に三寸ぐらい
縫たりうべぞゆとい聲と共に倒るを彌平
次飛うり膝に引しきゆ捻付とびゆ老狐の姿
とあらくしい悪き己う振舞やと刀の下緒をとり嚴敷
いまゝめ座敷へゆくとい長兵衛父子余念もなく
に眠り居たりあるとを見るに荒狐とおもひ

古筵のちぎとうて供物燈明へ更に見えぞこの
物音に長兵衛が妻をとらめ下人ども同じく座敷
に入てこの体を見大に驚きゆうくと眠りを醒し
此体を見をうべ長兵衛少く本心に飯く如
くなれども小七郎い猶も空氣て見えをけう彌平
次件の老狐を捻付く何故に入江父子を誑う
をとぞと責問べ小七郎黄なる涙を流今をこ
御手を御ゆるめ下さるべ有のまゝに子細を申
上ゆべ元我等い伊吹山に千年を經て住いの
なるを過に弥生の御游猟のとき我等が頭の子
共あつまりて御持との破子をけそれう御怒

とうけ終、と頭の任い窟ゞで見知とあるつさく頭の妻女い君の放ちあく玉とあくうて落命いく
いたゞくその時長兵衛殿まへ不愍なりゆるゝい
へとあくれその御詞いひひくなれども其時今と
ゝ嚴重と御ことびもひくゞ三宅殿みも御許容も
有べきと入江どのく被成うと云甲斐ゝくと存ゞ
ひくくうう小七郎どのと數日ゝるゝとひくなる
と申ようう弥平次ひくゝ怒う汝等へ千年と經
て通力自在と得ると聞と汝ゞ頭の妻と打殺其
上と煮て喰たるへ某なるとべ某とゝと怨むべくと
さいなゝ入江どのと怨うゝい誤なりるゝどゝ某と

べ怨ゝくるゞ左様の筋違の怨となるとゝくとてゞ畜
生なりうとのゝゝゞ小七郎ひゝゝ三宅殿へ大膽勇猛と
あくくまゝ如何とおのゝ共畜生の身うて怨をゝ
をとあくくゝ夫故と入江殿のひくくゝかあくれみ
と起くくゝ虚念と伺ひくくゝゝいへども三
宅殿の手裏剣と脳を碎うとひゝゝゞ我等も助うう
申さゝと云と聞て弥平次くくも白状くたり但汝
へ小七郎と詐うとくく本狐なれべ免くゞたゞ且汝
う従類も汝ゞ心と受繼で又もゝ人をたぶらゝゝ
此處の害となるべけゝゝ是くう人数と催ゝくゝ伊
吹山と狩盡くゝ汝等ゞ従類をたゝゝくくくと怒うゝ

めび小七郎身をふるひ其義へ何分ふも御免あふべしと一向ふびしうども弥平次更ふ容赦をぞ廣庭ふ引出し青松葉のて薫べ焼ふ焼殺したり志めい小七郎も其儘そこへ倒るふ更ふ生体ふうつけふう様々ふ人抱して後常ふめへうけう長兵衛い再度狐のためふ誑うされしと元来其身武邉の躾ふ故といい云ふうう面目もなふ次第ゆと弓籠う居たりけう三宅弥平次うくと聞ふう訪来う何故ふ此程籠居しふぞと尋ぬるバ左ればい父子共老狐の為ふたぶらうさるとゆひしと餘りふ面目なくおぞえいふ〳〵めく引こもう居ゆと答へけるふ彌平次何さま御邉の心中察入いさうちなうらむうしふう狐の為ふ誑らかされしのの小ふうらびいづれも武邉の躾ふ故ふもあふび元ふう畜生の事なれバ此人彼人といふ見分もあるまじ但直様御出仕あるべしと勧めうバ長兵衛いうふも御勧めふうう出仕いふとべくいへども一度ふらび二度すぐ老狐のためふ恥辱と受いい車いうふも残念至極ふい間近日のうち是非親属同僚とかふ催ふ伊吹山へ分入て狐穴をとくを堀穿ち狐ととべく狩殺し可申と存ひさいてあそ責ていい畜類ふ侵されし怨と晴け申べけると誠ふ思ひ入く

申けるゝ彌平次も思ひ〳〵思案し成程その御憤い尤至極よいさて彼山の体と考ゆゝ内廣くいへども勢子と催しいとも莫大の人数あるべき叶ひがたくいべし其上ゝ何故ゝ左様の企をいさとゆと屋形ゝ御尋のあらんゝ父子共狐ゝ誑されし怨をめへと為と申されんも外聞實儀然るべくも存ぜべい然者この山ゝ入て狐をとらんとあらく御見合ゆて然べしその外ゝ何そ御思案ゆて御父子の恥辱を清ざるべしと異見しけれ共長兵衛も理ゝおゝと何さま闇夜の恥を白晝人ゝ示を以ていい然べこの山狩いたゆゝ止まるゆべし其

外ゝすて父子ゝ恥辱を清むる了見更ゝ思ひ付申さべい三宅殿ゝの御ユ夫もいとゝ御教訓ゆへ〳〵とひゝとゝ折入てたのゝうべ彌平次只今急ゝおゝと申ゝ別もなくいへども当時の姿ゝてハ此處ゝ永住〳〵ゝとも花々敷ゝ有べくも存ぜべい林ゝ遊ぶ鳥も木を撰ぶ水ゝ浮ぶ魚い流をこのむ侍いとゝアゝのゝさゝ王を取申さべい高名もなう申ゝ我等い信長の御内なる明智十兵衛ゝ招うゝい間うゝゝへ参う可申い御邉も信長の御内へ御仕官ゆへ然しのちゝ立身〳〵今日の恥辱を御清めゆべ〳〵と勧めるゝゝ入江もゝ〳〵めて心付佐々木の家を退散をゝ

べ彌平次さま〳〵肝入て堀久太郎の家へ推擧〳〵けるよりの此陣中へも供をし〳〵なり

一説に入江長兵衛伊吹山のうめつ路日暮ふけれべ徑へ露多〳〵ん本道へ行べし〳〵とおのひつ〳〵歩むわとて路のかたへ〳〵見なれざる大家あり何人のいつ頃ろう爰に住おのすか覺束なし〳〵とおのへども可問人もあらざれば怪敷なり〳〵イめば内へ侍一二人立出てそれへ行るゝに入江長兵衛どのゝ此御館の殿の召をゝ〳〵ゝ御入あるとと申せ〳〵まうゝ怪や誰殿にあらせらるゝ遂に參上いたし〳〵い車も無にあまり無禮〳〵さ体すること否むをいかすせもをゝ手を取て門より内へ入るに

た侍二三人立出いろ〳〵も丁寧にあいさつ〳〵手人の待ぐるゝに早御入ひへと申よりやゝそて座敷へ通さべ主人とおゝ〳〵ここへ七十近き老翁なるゝ宿直のゝ〳〵と此程我いとし女と失ひて忌よこのろゆへべ迎へ參らをぬなり偖も御遣ひその志の穩〳〵情ふか〳〵在をとゝいらざうり難有人よゝであんなるそれ侍ども御客めてなり申をとさて圖とれべさまさゝの者取出て酒を勸め飯を進とけるうちに夜もふけてさう〳〵ゝべ燈火いとで明らけ〳〵てわと〳〵昼の如〳〵とうく〳〵て宿よへらんとおりのわどう侍すと一人出來り御宿へい先達て人と遣て〳〵今宵いられゝ御止宿のゝ〳〵と申てひゆる〳〵御休息ひへと申うちに女子供三四人出來りゝるゝ

よたれかゝり終よその夜と明ゝけるに雞の聲に驚き枕をあく
とゝ遠寺の鐘おう〳〵と響くこゝろねぐらを出る曉烏ちこゝろに飛ろ
ふとこれハ只今まで高樓大家と見えゝ無常處の五輪塔すて紅
顔翠黛のたとへめい如意輪觀音の石像けう〳〵長兵衛もわさ
て然ハ高宮河原の狐にぞうされゝまとおもひ付タ〳〵うのそあさ
ましゝ酒食いいくゝある不淨すておろゝ〳〵やらんと胸こゝろくおのひあぐ
おろうを見とゝ酒と入ゝ瓶子土器菓子肴と入ゝ破子かんとも常
の器にて殘りる酒とゝたく見ろに尋常のものゝハ却て勝ゝてろ
いゝ〳〵怪〳〵おのひけるに其夜高宮の某の家に客のあり
設のものとすきらゝ來ゝるなろゝ〳〵となろ

重修真書太閤記七編巻之十七終

重修真書太閤記七編巻之十八

入江長兵衛板懸の事
并左馬助友情と盡ハ事
親に車て孝故に忠君に移とゝ〳〵兄に車て弟故に
順長に移とゝ〳〵此言と推て則師に背き友に負き
〳〵人必忠と以く國に許とゝ〳〵何となれハ厚ふ
とゝ〳〵さ處に薄ひとゝ施とゝて薄ろうざる處ふ
〳〵とうゆむ〳〵呂布丁原が主薄となろ〳〵董卓
か為に原と殺〳〵又王允が為に董卓と殺と漢高祖
陳平と諸侯とふされけるに陳平御受と申さゝ魏

無知うとくめゝ非ゝい某君ゝ見ゆるあるべくと
申をしらず高祖陳平その本ゝ背うべくと仰らるゝて
陳平を封ぜらるゝ魏無知とも厚く御用ひあうしと
なう呂布が執へらるゝ時魏の曹操ゝを用ひゝ
ちんとあうけるを劉備側ゝう呂布丁原を殺し董
卓を殺ひ何とて公の為ゝ忠あるべけんやと仰ら
るゝうべ終ゝ忠れを誅をらるゝ明智十兵衛細
川藤孝ゝ仕へゝ遂るあるべく去て朝倉義景ゝ仕
へまゝ義景を棄て織田殿ゝ仕へうて義景を殺
いうとく呂布ゝ仕へうとゝゝうさうされば織田
殿の大恩をとゝれゝ忽ゝ本能寺の亂を起し内裏
ゝ暗近し京都ゝ旗を立地子を免許して町中の意
を取しうとも山崎の一戰ゝ打負勝龍寺の戰も利
なく小栗栖の土民のゝめゝ百年の身を誤ち終ゝ坂
本の城を責破らんう為ゝ羽柴筑前守の勢雲霞の
如くおし寄たり城中ゝい明智左馬助光春を始め
長閑齋入道以下必死を極めて明るを待たとへば
跖の犬の堯を吠たるためしもあり天正十年六月
十五日の曉りゝる山寺の鐘の響も何とゝくちめ
とゝらうを聞られば寄手の先陣堀久太郎秀政の
侍ゝ入江長兵衛といふものあう元るう明智左馬
助と親しき交際ふをとゝも武勇いそれゝ似も付ば

只世ゑつゝて欲心ぐのうい熾盛なり此陣中ゑ有
とても弓箭の道ゑ跡ひきび大勢ゑ勝ゑて高名を
んと覺束なり〳〵思ひ出ーことあるを昨日湖
水と馬うて渡ー鬼神ふ〳〵めと總陣ゑ噂の高き明
智左馬助い光秀ぐゝの隨一なり定めて當城ゑて討
死とるなるべー更べ〳〵の好もわり忍び〳〵對
面ー首を貫て我功と申立なぐ一廉の恩賞を得べ
きのゝとゝ考別ー我備と抜出てゆゞるのゝ〳〵さ
其内ゑ塀の下迫寄付て便宜やあるゝと待居ゝり城
中ゑて明智の内室於牧の方明智兵庫助光安入
道長閑齋同左馬助光春以下明ふべ快ゑく一戰ー

その〳〵ち自害をゝーと夏の夜の明ゑをそーと待
ゝぶる刹那の間も油断をび城中をゝを廻り役所
役所と見ゑーー大手の櫓ゑゝり上り狭間の板の
をき間ゑり寄手の陣と見ゑゝーー塀の下をゝり
ふる人影ありとおぶえーりび何のなるゆと差
のぞき能々見るゑ正ーー人の立たるなり左馬助
それゑ立ーい誰人ぞ優ーくも抜懸ーて一番乗を
せらるゝゆ名字と聞て後ゑ見參仕らんと聲とゆ
くゝびふり仰のぐ左いふい明智左馬助殿ゝ是い
入江長兵衛ゑていと答ふ左馬助心の中ゑおのゑ
様ちゝーゆ入江長兵衛日頃臆病ふる氣質ゑ似

も付け扱拭して高名をんとい奇特なうさうとて
い殊勝ふうと深く感心し聲をひそめていうよ入
江殿御邊と某といむうしうう無二の懇意なうつ
ふる今い敵となう味方となう互よ鎬を削る中と
なるたゝ當城の落去今半時を過べうらば然ふ
に計らば對面をすること實よ宿世の因縁といふべし
是年來の志の届さ一處なう生前の本望あれよ過
ぶと悦びしうべ入江長兵衛樽を見わけ何さよ左
馬助殿の仰の如く御邊と某とい竹馬の友も同じ
けさど若うけ違ふて生前の對面うあらばい何ふ
どう殘念あるべきようゝ面會よ及ぶこと我等もい

かゞうう大慶よ存ぜ但御存の通うの某なう一
番のうと心拭ることも何として手よ合わどの働を
ふし得べきそれよりゝ扱拭をい餘の義ふらば
當城の落去すさ程あうともおゞえいて貴殿よ
い定めて戰死あるべゝ存ぜうう他人よろる
と渡さば某これと申受大將の見參よ入ゝ第一の
勲功よ仕うぜんと存ぜいてうゝ迫ハ寄ていなう
と云と聞て左馬助涙をたとし何樣それも厚さ交
誼のいゝば処近頃のつゝ過ふよ楚の項王ゞ呂
馬童よさづけ例よなゝひ首をば御邊よ參らば
べきうなゝ今てた及ぶ光春ゞ入江殿よ申殘

さん異見あり聞入あらばよし念とれとべ入江長兵衛あどゐ左様に余處〳〵のと仰らるゝぞ早仰らるゝへと急ぎとれば左馬助聲を正し我若年のその昔より武藝の為に身を疑ひ一日片時も怠りなく寝食ともに忘れて力を盡し氣を満し戰場に臨では先陣に進み又い殿し鉄炮の炮にむび捨刀に身を傷うたゞ勇士の名をあらるを以て専といふ〳〵難とをのさいひしう今日に至りて胡蝶の夢に比しそれなりさ御邉に異見といふい他事あらばとゆく仕宦と止市中に身をひそめ陶朱猗頓の富とい

しその身一生を安くとるのこゝろ〳〵子孫の榮華を計うあへといひしうば長兵衛熟と是を聞いうに明智殿の異見に從ひ太刀も刀も打とそ〳〵と早速に市人の中に入ひべと答へしうば左馬助いぐさ〳〵べ一番乘の首をとる〳〵申べとて大なる革袋に黄金五百両入縄をそけ櫓にうに操あり是を入江にとゝ〳〵せしうば長兵衛らけ取て存も寄ぬ御懇意のわど返とぐも辱あ〳〵名殘おしくいひへども時刻うつるとべ人も知御志も無下にあらん早御暇といひもあ〳〵べ塀の下を立退バ左馬助

もろ〳〵と共に見送りつゝ西と東へ分れゆく心の中こそゆるせなれ

一説に入江長兵衛明智左馬助ろう五百両の黄金を得そしらう直に堀げ陣を引退き山城國白川の奥に閑居し枚の實生を拾ひこゝに植て養ひけるわゝ三十年まゝて數千本を致しつゝ是を切て銀に替ゝ年々に植繼し材幾許といふ数を知ざるわゝなりて歳に替ふる處の銀まゝ次第に繁殖し長兵衛八十九歳まゝて没する時い財わゝとんど十万に及びゝとなり

又或説に入江長兵衛明智ろう得し五百両の金を以て雑と飼けるに期年まゝて三千餘に及ぶまゝ其門を銀に替けるに京白川いふに及びて大津山科伏見淀うけく入江の卵を買求けるに是もまゝ数年ふゝびして数千金を致せりといふ嵯峨の土人の傳ふる處ハ此里に竹を植て其筍を堀其竹の皮を取ゝ其竹を賣ゝと入江長左衛門といふ人ゝ云又鴨河の泥魚を取ゝるひハ白河の石を切出いてゝそゝく入江長兵衛ゝゝめし処なりといえり誠に然るよゝ

左馬助珍器を寄手へ贈る事

并坂本落去光秀室家以下自殺の事

天正十年六月十五日の拂曉こゝう本丸よりて い最期の酒宴を催ふしけるゞ明智左馬助光春へ信長公の安土城よ籠給ひし目録を取出しそれよ合せて珍器名物名畫刀劍をべ〳〵二丸よ收め置しと改め次よ櫓の武者ぐゝうよ立あゝくれ寄手の陣を見るゝとこば一番よ堀久太郎秀政の備大手の前まで押寄て扣えるゝ光春大音あげそれへ寄るよへ堀久太郎殿う是へ明智左馬助光春よい近々と御寄ひへ我々ゞ冥土へ趣くその前よたゞ一言申置さ事のいなうと呼てゝけるよふう秀政承らひ

と答〳〵て只一騎堀の際まで打寄何事と申置さひこて召さひぞ是へ堀久太郎秀政よいとゝへば光春莞尓と笑ひ久太郎殿よいう光春う最期そゞよ近づさひへ心世話敷とハ申ゝゝ是へ末代の為よい間たしうよ御邉よ申置ゞゆゝ存じめゝい御招さ申いなう抑織田殿こゝう光秀よ賜こうていひ珍寶名物名画多くひ〳〵上安土よめ〳〵集めゝれ一品々も大形光秀奉行仕うていゝべその來歴ふぶさよ光秀ゞ記し置ていなう只今その目録よ合をて御渡し可申ひゝ第一番よ國行の太刀是ハ足利將軍家代々よ傳こうひ名物ひすへ二尺七寸

今國行と二字銘の太刀二尺七寸莖七寸一分あるものゝ是なり

第二番に國俊の刀第三番吉光の脇指その次に奈良の肩衝の茶入て御前の釜鎖籠の水さし并に壺堂の墨跡宋朝より渡せし無名の天目徽宗皇帝御筆文宣王左右鷹の三幅同じく鷹の三幅同じく百花の三幅何れとも表装い蜀江の錦なり

奈良肩衝ハ信長公より金森兵部大輔長近へ賜てゝ一なり然るに信長公本能寺にて御茶めし上らるべき由仰られ時長近懐中より是と出し御茶奉りしに數奇の心掛厚きと深く御感あり〻と〻なり然ふに長近ハ江州へ御使に下て〻跡にて明智うの亂起りけるに此茶入不思議に回禄と共に光秀が手に入りしと今日やうに筑前守の許へ贈りしなり筑前守うけて金森へ下さしし由を知つゝ直に法印に返し與へしとかう聞金森家にて出雲肩衝と云是なり或云奈良肩衝い南都松屋源四郎所持の茶入なりしと信長公めし上らるゝ御秘蔵ありしとなり何とも是なるを知り乙御前の釜ハ玩貨名物記に松平相模とあり彼家に傳えしとなり

千鳥の香爐これハ今川了俊所持にして其家に代

代傳へたるを氏真の代より信長公へ奉りしなり
塩筒の茶碗荒木攝津守秘藏をし三嶋桶の茶碗割
香臺高麗の茶碗い南都珠光の所藏なりそや舟の
茶碗い大内家より傳來深付祥瑞の花入秘色さぬ
たの花入紹鷗所持の小つぶらと云名物の花入東
山殿御秘藏あり曙の茶板それとういをし面影
の茶板うどゝあり唐織の宿直袋より入その外
と嶋とうのゝ小袖りて幾重ともなく引いこも
女の帯の組厚さとえゝびて是と引結ひ其上より等
縄と付て櫓より是と操下しちうい堀久太郎是と
請取左馬助殿の御口状具に承知いたしていをらや

めに筑前守へ申入つゝ夜も明ひんぐ又あを見
參仕るべくいと答つゝ彼目録と名物の包こと
取持を筑前守の本陣へ持參し左馬助ゞ申つる口
状おちもなく語りなのゝ目録に合をそうの珍器
名物を改め筑前守も涙とゝぶゞし先年松永彈正が
志貴山滅却の日秘藏をし平蜘とゝふ茶壺を碎き
しとい雲泥万里天地懸隔をし心のうちのそゞし
さゝと三四万よあまる諸軍勢心あるも心ふさも
涙おとさぬのぞなるさ天晴おしき侍うゝ三宅彌
平次とゝひし浪人の昔ゝう今い一城の主として
明智左馬助とゝ迫所々の軍功筆に尽くしゝ

〻眼前大津の戰〻ろう湖水を渉り武邊の体たら
ぬ是〻君と並ぶべきとろぐ〻い鳴を静めけう兎
角とるうちも夜もわの〻と明るされば左馬助本
丸〻入め〻〻取計ひ〻由を申げしべ於牧の方も
大〻悦びのそ此世〻思ひ置とな〻去べ故殿〻
追付て此ありさまを語り申さんと云うとみしべ
天壽丸とて八歳の男子のありけるを引〻そて指
殺〻

　　たかまさを誰うを〻〻ん朝がほの
　　さかり花せ〻花もひ〻〻よ

と書終り九寸五分の劍を胸〻あて紅〻あり

てゞ失〻ひけう行年四十八歳なれを見て御供〻と
おのひ〻のと先立ゐひ〻ことのあらざるゐとい
ひけり〻左馬助が妻とそ〻ゞめ年來の情〻とそれうと
〻て同じ枕〻五六人ぞ自害をべ〻たりけう長閑
齋されを見て女ふ〻らも齋藤の血脉氣ふげふも
振舞ゐふゐのうふと感歎〻是も同じく腹を切べ
奥田清三郎が錯〻〻と力〻腹うさ切ふふ〻く俯
伏〻なりて死てけう長閑齋六十七才清三郎三十
八歳とうゐ妻木勘助と奥田佐右衛門とい是とみ
て我等も同道申べ〻と云なが〻差違へてゞ相果
ぬ左馬助ハ人々の体〻見終り心静〻墨とう流〻

一戰國中生未知風月情
朝出師望魁夕地策連營
依几臥龍術横鉾千里行
幾英名如夢終節帰清明

と一聯の詩とうたのこゝ腹十文字ようさ切〳〵
だ舟木八之丞ゟれと双錯〳〵同じ〳〵腹と切てけり
光春今年四十六歳いまゞ盛よおゝうるべき勇士
なり本丸すてゝ兼て左馬助ゞ下知よ従ひ焼草多
く集め置〳〵うべ人々の自害を見るゆ否火をうけ
たり〳〵よ折ふ〳〵比叡山おろ〳〵烈〳〵吹來り黒煙
天と焦〳〵て燃上る寄手の面々是を見てをそれゆ城

中よ返忠のゝのあるゝ又い自焼をるゝとゆ乗入
と下知〳〵つ〳〵大手うゝめて一同よ馳集う塀よ手
とうけ跳う上うおめ〳〵よゝこ入ゝバ早本丸い炎
さうんゝて一時ごうう焼失たう然ゝバ羽柴勢
坂木ゝてい一合戰あるゝべ〳〵ことよ左馬助ゞ大津よ
ての働をゝバ見知さう最期の軍いさゝをるゝ〳〵
らんと推量〳〵まい似も付ゝ矢一つも射ゝて〳〵
如斯なう行〳〵うゝバ筑前守もさゝゞよ世よ希なる
侍ゆとこゝ〳〵い感じてことゝバ〳〵火静ゆうてのち
本丸よ入て見ゝバ上下百三十九人ゞ死〳〵たうけ
う

一説に左馬助が雲龍の羽織二の谷の曹坂本西教寺に
あるけると五十年の後西教寺の且那山中山城守長
俊の孫作右衛門友俊申請て所持し紀州家に仕へ
ゲ年經て二谷の兎ハ松野大學といふものゆづりそ
ち宇佐美造酒之助孝定の藏となる孝定ハ宇佐美三
郎祐茂十三代右衛門尉祐孝の孫駿河守定行に五代
の孫なり
又一説に明智日向守光秀内裏の駕輿丁猿丹後といふ
の〳〵女と妾とゝて男子あり天正十年ハ二歳なり是を
助けんが為に光秀の内室さゝぐるに夫し天壽丸といい
ふ八才の子いその實何のの〳〵子なるゝ知ざられと手

許によりて〳〵ひ〳〵ハ落去の時に捕られと殺し光秀の亂子ハ絶
たりと人々におもへりそれとの謀なりとぞ猿丹後ハ矢瀬の
里の人なり因て女と共に朽木谷を經てそこと忍び
のちに丹波山國にのがれ世定てのち矢瀬にもどり住し
なり今に其家に光秀の遺物とて香合あり吉光の
刀七寸三分勅賞地に桔梗の紋付しを藏をと云
又無名の天目ハ聖一國師將來のものなりゝ東山殿の
御物となりそれのち京都將軍家の御道具として義
昭將軍に傳ゝり終に信長の手に入りを今羽柴筑前
守ふるゝ後に前田利家に賜ゝりといふ故に
幅ハ所々に傳ゝり〳〵ゞ織田信雄

又村井又兵衛い光秀滅亡の後加州ゑ仕へ今ゑ現存セ
といひ四方田又兵備い東國へ下り佐竹家ゑ仕へしとふ
筑前守この体を見て日向守の逆意いよ〳〵むべし此の
の共へ日向守の恩ゑ報ぜんとて〳〵ざろう尋常ふ終
てを取〳〵こみけのめげさる日向守の侍を養ひ心を織
田殿ゑのうをたゝやうゞ光秀ゞ如きのものもあるまじ
く左馬助ゞ心を光秀ゑのうをたゝんゑい何とて織
田どのを討奉るべきたゞひゑおゝきふるまひゆと泣
泣うゝと申されき

重修真書太閤記七編巻之十八終